
蒼影

十浦 圭

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼影

【Nコード】

N0399X

【作者名】

十浦 圭

【あらすじ】

「・・・それでも私は、世界を変えたい。」
大海賊時代、荒くれ者と海軍がその力をふるう中で、世界を変えようとした少女がいた。

オリキャラである主人公と原作キャラとの恋愛描写・それに伴う原作キャラの大幅なねつ造があります。

さらに主人公が完全にオリジナルキャラクターで、感情移入しづらくなっています。

つまり転生やトリップ要素はありません。

苦手、どうしても受け付けないという方は読まないようにお願いします。

主人公設定（前書き）

設定に夢小説サイト「HL」様・「こけた。もう立てない。」様の ONE PIECE 連載の設定と一部類似した点がありますが、事前に管理人様と連絡をとり、掲載許可を頂いたうえで公開・連載しております。

主人公設定

ランクライト・ゼロル（21）

所属：ハートの海賊団

異名：黒本作家・蒼影

身長：163cm（ナミが169cmなのでかなり小柄な方）

外見：濃紺のショートヘア・群青の目（垂れ気味で大きな目）

胸はEくらい・目を引くほどではないけど、「普通に」美人。

出身：西の海
ウェストブルー

備考：悪魔の実の能力者。戦闘方法は能力と二丁拳銃。

ハートの海賊団に所属する前と、所属してからとで手配されているために手配書

が2枚あり、異名もふたつある。

以下、能力や過去設定のネタばれです。能力は「まどろみ」で、過去は「墓荒らし」を読めばわかります。本編より詳しく知りたい、という方はスクロールでどうぞ。もちろん見なくても本編を読むのにはなんの支障ありません。

← ← ← ← ← ← ← ← ← ←

← ← ← ← ← ← ← ← ← ←

能力設定

能力：超人系・キヨヒキヨヒの実の拒絶人間
パラミシア

本人が望む対象を「拒絶」できる

？ 存在・現象それ自体を拒否して消去、無効化する

？ 存在・現象を発動している間だけ拒絶する

度重なる発動、難易度の高い発動は精神疲労を招く

訓練によって精神披露は改善できる

基本的に？は対象に、？は自分に使うことが多い

○技

記憶：メモリ記憶されることを拒否。拒否する内容も選べる。

記録：レコード記録されることを拒否。写真・文章なんでも。

能力：アビリティ悪魔の実の能力の発揮を拒否。能力自体を使えなくする。

イグジット
存在：存在することを拒否。指定したものを”消す”。

コンタクト
接触：触られることを拒否。攻撃の回避など。

アウェア
認識：認識されることを拒否。そこにいるのに、認識されなくなる。

グラヴィテーション
重力：重力を拒否。浮いたり、落下速度を調節できる。

アントラッシュ
嘘：嘘を吐くことを拒否。相手が嘘を吐けなくなる。

リバティ
自由：自由行動・自由意思を拒否。相手の動き・思考を封じる。

イフェクト
影響：影響が及ぶのを拒否。例・地震に使えば拒否した場所のみ揺れなくなる。

ペイン
痛覚：痛みを拒否。痛覚を一時的になくす。

リアリティ
現実：現実を拒否。負担が大きいが、現実に起きたことならなんでも拒否できる。

「能力」はその能力自体をまるごと無効化・封じるが、「影響」はその能力によって引き起こされた現象が自分や対象にだけ起こらない

「自由」は“行動拒否”と“思考拒否”の2パターンある

「重力」はいくつか段階がある

海・海棲石に「存在」は効かないが、触れていない状態なら「影響」は有効である。

また、自身が触れてないなら海中の物体への能力の行使は可能で

ある

過去の設定

5才の時に、島に難破した天竜人を村人が助けるが、後に迎えに来た海軍に天竜人が「不愉快な村だった」と発言したために、村が海軍・政府に潰される。

1週間もの間崩れた岩の中に閉じ込められ、それがきっかけで暗所・閉所恐怖症に。

襲撃のせいで村人のほとんどが死亡。隣町の親戚のもとで育てられる。

この事件がきっかけで貴族制度に疑問を持ち、本を書くことで人々の意識を変え、「世界を変える」ことを目指すようになる。

いくつかの本を出版。どれも内容や設定に多かれ少なかれ身分制度の批判を含むもので、5冊目の出版で、危険と判断され、作家として賞金首になる。

キャラクター設定（前書き）

この連載における原作キャラの設定・オリキャラの設定です。こちら
でも読まなくても、本編を読むのに支障はありません。

キャラクター設定

「蒼影」シリーズ

ハートの海賊団のメンバーの設定です。原作に登場するキャラクターに勝手に設定を作ったり、オリジナルのキャラクターの設定を載せています。

名前、年齢、役職、獲物、出身、外見、身長。の順番です。

○トラファルガー・ロー（23）

船長。医者。能力者。長刀。ノース。肌は漫画の色を採用。179

○ランクライト・ゼロル（21）

作家。キョヒキョヒの実の能力者。二丁拳銃。ウエスト。163

○ペンギン（26）

副船長。ダガー。ノース。青の短髪に灰色の目。183

○シャチ（21）

整備士。ゴツイ銃で接近が得意。ノース。金髪金目。175

○ベポ

潜水士。白熊。カラテ。

○ジャック（31）

コック長。柔術。ウエスト。朱っぱい茶髪に茶色の目。ヒョロデカイ。192

朗らかで人当たりが良い。料理に関しては人格が変わる。

○ダイヤ（20）

コック見習い。大ぶりの包丁。黒髪に黒い目。ノース。細見なのに馬鹿力。169

皮肉っぽい性格で口数は少ない。

○クロバ（18）

植物師。フェイシング。深緑のくせ毛短髪に緑色の目。サウス。170

サバサバした明るいイイ奴。記憶力がいい。

○スピード（33）

航海士。薙刀。濃灰の長髪を後ろで一つに。グレーの目。ひよろい。177

超マイペース。身内にしか興味はない。たまに眼鏡をかける。

○Mr.（26）

船医。トンファー。黒髪のくせ毛に青い目。178
爽やか紳士な腹黒キャラ。根は優しい。

○ジョーカー（17）

機械師。ボーガン。薄い灰色短髪。紅い目。170
ビビリで常に丁寧語。プツンしたら最強になる。

まどろみの目覚めを待っている 眠りを揺らがす出会いの始まり？（前書き）

タイトルはお題配布サイト「シュロ」様からお借りしました。

まどろみの目覚めを待っている 眠りを揺らがす出会いの始まり？

ドオン、と背後で銃声らしき音がして、しかし彼女は振り返らなかつた。

それは彼女の能力からすれば必要のないことだったから、とも言えたしーそもそも周囲の環境からしてその程度のことδειいちち振り返るような気にはなれない。

そこで繰り広げられる喧嘩、戦闘、それをはやし立てる野次の集団を避けて歩きながら、彼女、ランクライト・ゼロルは小さくため息を吐いた。

ここは偉大なる航路前半に点在する島の1つ、「ラフ島」である。
グランドライン

美しい自然と整備された宿泊施設が売りであるこの島に訪れるのは、しかしながら海賊や賞金首ばかりであり、一般人の住まいや食事処が並ぶ表の通りはともかく、そこから少し外れた裏通りに入れば、海賊同士の喧嘩や賞金稼ぎと指名手配者の戦闘などであふれていた。遠くの方で響いた銃声に呼応するかのように左で大きな爆発音が起こる。

どっかの馬鹿が手りゅう弾でも持ち出しているのだろうか。

爆発によって巻き上がった煙を見るともなく眺めながらその横を通り抜ける。

砂埃が収まる隙もない。爆音はしょっちゅう響く。裏通りでは血の臭いがするのが当たり前。このような物騒な町は、大体平和主義者を自称する自分の好むところではない。

にも関わらずこの島に来たー否、来てしまったーのは、ひとえに自分のミスであつて。自分としたことが随分と初歩的なミスを犯してしまったものだ。

美しく雄大な自然の景色に、海賊の客やこうして女一人で旅をする自分にもきちんと対応する宿場は悪くはなかったのだけれど。その

BGMが誰かの悲鳴や怒声である、というのはちょっといただけない。他の島でだってそこまでくつろいでいた訳ではないけれど、この島に長期滞在するのは精神衛生上、あまり良くない気がする。とはいえ来てしまったものは仕方がないから、一応楽しんだのだけだ。

既にそれが諦めというよりは開き直りであることは、自覚しているがしょうがないだろう。

喧嘩のどさくさに紛れて高価な酒を何本かくすねさせてもらった自分が今さら愚痴ったって、笑い飛ばされるだけだろうし。

見えない誰かに対して多少言い訳めいた思いを抱きながら、勢いよく倒れてきた男をひよい、と避ける。

必要な買い物などは既に全て済ませたため、これ以上この島に滞在する理由はどこにもない。

今度はちゃんと船の行き先を尋ねてから、乗せてもらえるか頼むようにしよう。

そう心の中で呟いた横で、また誰かの悲鳴が響いて。

次の島は夏島だといいなあ。

その悲鳴を気にもせず、港へ向かうゼロルの脳内は既に次の島へと向かっていった。

港へ近づいていくうちに周囲の闘争も少しずつ増えていく。おそらく劣勢に追い込まれた側が、船に逃げ込もうとしているのだろう。

周囲に転がった賞金首をほいほい避けながら、ゼロルは顔色も変えずに歩き続ける。

その歩みが一瞬止まったのは、

「くそ……！トラファルガー・ローツ」

さながら塵のようにふつとばされて地に伏せた賞金首の、苦々し気な呟きが聞こえたからだった。

トラファルガー・ロー。

気持ち乱れた歩調を戻しながらちらりと、賞金首と交戦中の集団の、

その中央に立つ男を確認する。

赤子の手を捻るように造作もなく、幾人もの賞金首を返り討ちにしておいて、その男は確かににやりと嗤っていた。

北の海出身、ハートの海賊団船長、「死の外科医」。賞金額はたしか……

1億。

大した実力のない賞金首連中が相手とはいえ、この光景を見るに、その実力は賞金額に負けるものではないらしい。ちらりと見えた表情には暴力に酔った馬鹿などとは一線を画した、どちらかというところ狡猾そうな光が浮かんでいて。

敵に回せば厄介なタイプろくな、と思いながら。

素知らぬ顔で――1億の賞金首になんて気づいてすらいない、という素振りで喧噪の横を通り抜けようとしたゼロルは、しかし、誰かに勢いよく腕を引かれたことでその意図を瞬時に碎かれた。

「動くなあつー!!」

叫ぶ賞金稼ぎを呆れた気分でクロバは眺めた。

もはやその目的は、船長を、自分たちを捕えることより無事に逃げ出すことにあるのだろう。圧倒的な実力差でねじ伏せられて、追い詰められて。男は、脇を歩いていた少女の腕を引くと、血走った目で叫んだ。

「道をあける!!」

冷酷だと噂されるハートの海賊団だが、実のところ、無関係な人間を人質にとるとするのはそれなりに有効な手段だったりする。

確かに噂のほとんどは本当である。自分たちに徒なす者たちは、容赦なく潰してきたのだ。だが、自分たちは別にただの荒くれ者の集団という訳ではない。理由もないのに、なんの非もない無関係の人間を見殺しにするなんてことはしない。

この程度の相手だったら、今見逃したからといって、別段問題がある訳ではないはずだ。

船長はどうするつもりなんだろう。そう思ってクロバはちらりと自身の船長を見た。

そして、彼の目が男ではなく、その腕に収められた女の方に向けられていることに気が付いた。

面倒なことになった。

男に捕まえられたゼロルが一番最初に思ったのはその一言であり、それ以上でもそれ以下でもなかった。

そこに賞金首への恐怖や人質になったことへの焦りは欠片もない。できれば関わりたくなかったのになあ、とは思ったけれど。実際、自分の体はこの男にがちりホールドされていて。別に恐怖や焦りはなくとも、捕まえられる、直接的に言い換えれば大柄な見ず知らずの男に抱きしめられるというのはそれなりに不愉快だ。

こうなつた以上は仕方がないから、とりあえずこの場を離れてしまおう。

緊迫感など欠片もないが、心中でとりあえず結論を出して。この状況を収めようと、口を開く。

「あなた、馬鹿じゃないですか」

出た言葉の語尾がややきつくなつたのは仕様である。

「なっ、」

「海賊に対して一般人の人質が通用すると思ってるんですか？」

相対した海賊よりも先に、抱え込んだ人質からリアクションがあったことに、その男は驚いたようだった。こんな状況に巻き込まれた女が冷静に発言したということの方に驚いているのかもしれない。

「あなたが狙っているのはハートの海賊団です。知っていて狙ったのかどうか私は知りませんが、彼らの評判はかなり悪いですよ。

冷酷無情、血も涙もない海賊団。主に悪名の方が広まっている海賊です。普通の海賊に対しても効果はないでしょうに、そんな相手にたいして仲間でもなんでもない私を人質にとって意味があるとも思ってるんですか」

「なにを、てめえ・・・!!」

「人質にとられた上にあなたにてめえよばわりされる筋合いなんてありません」

馬鹿よばわりされて一気に頭に血がらしい男の顔を見上げる。どうやら自分の言葉でこの男、どうして自分が人質を取らなければいけなくなったのかを一瞬とはいえ、忘れてしまったらしい。

この分だと頭の出来もそうよくはなさそうだな。分かっていたけれど。

そう頭の片隅で思いながら、男をさらに怒らせるために言葉を続ける。

「あなたのような人間に拘束されるのはとても不愉快です。早くこの太いだけの腕を離して頂けます?」

一瞬の沈黙が落ちて。

「このアマっ!!」

男が怒り任せに銃を振り上げる。一瞬自分を拘束する腕が緩んだ、その隙を逃さずにゼロルはすかさずその場にしゃがみ込んだ。

ゼロルの頭を殴ろうとした腕が大きく空降るのを上目使いで見ながら、目の前の右足を思い切り蹴りつける。

ふとももから愛銃を取り出し。

立ち上がる勢いで倒れこんでくる男のみぞおちに銃座を叩き込み。

腹を抑えた男の無防備な後頭部に手刀を降ろし。

倒れこんだ男の体をバックステップで避ける。

その間約30秒。

まあ、大体イメージ通りかな。

背後で自分を眺めているハートの海賊団に注意を払いながら、それでも、あっけなく意識を飛ばした男の姿に満足して、ゼロルは銃をホルスターにしまった。

まどろみの目覚めを待っている 眠りを揺らがす出会いの始まり？（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

読みづらいなどのご意見があれば、できるだけ改善していきたいと思っています。何かあればご連絡下さい。

感想を頂けたら喜びます。執筆の原動力！

まどろみの目覚めを待っている　眠りを揺らがす出会いの始まり？

鮮やかな手際で男をのしてしまった女の姿に、クロバは絶句した。自分以外の船員の反応も大体自分と似たようなものだった。驚いていないのは自分たちの船長と、その隣に立った副船長のペンギン、くらいだろうか。

確かに人質に取られた時の反応、冷静沈着ぶりを見て、堅気の人間ではないのかもしれないとは思っていたのだけれど。予想していた以上に動きが良かったのである。下手したら自分より強いかもしれない。

銃をホルスターにしまって、女はふいに男の横にしゃがみこんだ。そのまま男の懷をこそごとと探り始める。

何をするつもりだろう。

クロバが目を瞬いていると、女が取り上げたのはどうやら男のサイフであるようだった。

泥棒かよ！！

思わず心中で突っ込んだものの、ちらりと見えた隣のシャチの顔も引きつっていたから、自分の顔も同じような表情になっているのかもしれない。

目的が読めない。真意が見えない。あの女は排除すべき敵なのか、否か？

ちらりと船長をうかがうも、彼は若干面白そうな表情で女を見ているだけだった。

少なくとも、船長は彼女を敵と捉えているわけではなさそうだと、それだけを読み取って。

しかし一応、とクロバが警戒心を引き上げた時、

「・・・？」

一瞬前までたしかに傍観に徹していた我らが船長が、どこか訝しげな表情に変わった。

男の胸元を探つて、1分もせずにゼロルはサイフを探り当てた。大体こういう男には創意工夫というものが見られないのである。

最近誰か海賊を捕まえたのか、大分入っている札を数枚残して、すべて抜き取ると、ゼロルはなんの躊躇もなく自分のサイフへ移した。迷惑料というべきか、せつかく倒したのだからこのまま去るのはいらないと思つてしまふ。これも貧乏性と言つべきだろうか。多分、いや絶対違ふのだらうけれど。

自分のサイフを鞆へ戻して。最後の仕上げとばかりに、なるべく自然な様子で男に触れて。

能力を発動させた、その時。

「おい」

それまでだんまりを決め込んでいた背後の男から、声かけられた。

「はい？」

無表情で、しかしどこか不思議そうな様子にも見える表情で振り返つた女は、こちらをまっすぐに見つめ返してきた。

これは一般人ではないな。

分かり切つていたことではあるものの、ペンギンは心中で呟く。銃の扱いにも慣れていたようだし、賞金稼ぎだらうかとも思ったものの、それだと最初に自分たちの傍を通り過ぎようとしたのが腑に落ちない。それなりに実力はあるそうだから、こちらとの実力差を測つたということだらうか。

とりあえず、今のペンギンが確実に言えるのは自分たちの船長が、完全にこの少女に興味を持つてしまったということであつた。

シャチャベポと会つた時と全く同じ目になっている。こうなつたら誰も止められない、もちろん止める気もなかったが。

自分だって、この旅人とも賞金稼ぎとも分らない少女に多少興味を覚えているのだ。

「お前、賞金稼ぎか？」

どこか興味深げな光を目に灯したまま、傍らの船長が尋ねた。

「いえ。ただの一般人です」

「へえ？巻き込んで悪かったな」

「いえ」

淡々と船長と言葉を交わす少女に感情らしい感情は見えない。怖がるようなそぶりも、嫌がるようなそぶりも見えなかったが、ペンギンには言葉を交わすことに彼女の警戒心が高まるのが分かった。少しうつむいた少女に、こちらの警戒レベルも上げる。

「賞金稼ぎじゃねえってことは旅人か」

「まあ、一応」

「で、」

質問を繰り返していた男の、どこか面白がっていた雰囲気がつつと強くなって

「なんの能力者なんだ？」

一瞬、顔が引きつりそうになるのをゼロルは必死に押さえつけた。

確かに能力を使った瞬間に声をかけられたけれど。まさか、まさかとは思っていたものの、本当に見破られていたとは。

だから関わりたくなかったのに。

心中で呟く。

長く旅をしているが仕草だけで能力を見破られたのは初めてである。すごいところじゃない、反則みたいな洞察力だ。

とはいえ、先ほどから繰り返されていた質問の意図が分かって少し安心した。そりゃあ、人質にとられた女が自力で犯人を倒してしまつたら興味も持つだろうとは思ってたけれど。それにしてはやけにしつついなと思っていたのだ。

警戒レベルを上げていたのも、そのためである。

しかしゼロルはもともと自衛以外の戦いは好きではない。しかもこのレベルと敵対するなんて、自衛でも避けたいぐらいなのだ。

面倒だというだけではない。まだ悟られてはいないようだけど、こ

れだけ頭のいい人間に自分の正体や目的を知られたらどうなるか。
結論はすぐに出た。

無言のまま、ゼロルは先ほどまで斜めに立っていた自身の向きを変えた。これでゼロルは彼らと完全に向き合う形になったことになる。自分の視界に彼ら全員の姿が入っていることと、彼らと自分との距離を目測で確認して。

「あなたに」

口を開いて、

「教える気はありません」

言いきって、にっこりとほほ笑みかけてから、ゼロルは能力を発動した。

まどろみの目覚めを待っている 眠りを揺らがす出会いの始まり？（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

読みづらいなどのご意見があれば、できるだけ改善したいと思っています。何かあればご連絡よろしく願います。

感想を頂けたら飛び上がって喜びます。執筆の原動力！

まどろみの目覚めを待っている　眠りを揺らがす出会いの始まり？

それまで無表情を貫いていた少女は、不敵に笑って。
次の瞬間、彼女の姿はかき消すように見えなくなった。

驚きのあまり立ち尽くした彼らの横をすり抜けて、その姿が完全に見えなくなるほど遠ざかってから、ゼロルは初めて能力を解いた。
張りつめていた緊張も解く。いくら物騒とはいえこのレベルの島でこんなに緊張することになるとは思わなかったのに。

仕方のないことだけれど、やっぱり無駄な体力を使ったような気がしてならない。

ひとつため息を吐いて。よし、と気持ちを切り替えると、とりあえずすぐにでもこの島を離れてしまおう、とゼロルは港へむかう足を速めた。

「この近くにはいない、みたいですわね・・・」

目の前に立つ船長にクロバは口を開いた。5分ほど辺りを探してみたら、彼女の姿はどこにも見えなかった。もちろんいたとしても、あの能力を持続して使っていたとすれば自分たちには見えないのだろうし、第一、頭がよさそうに見えたあの少女がまだこの辺りをうろついているわけがないだろう、ということとは、クロバにさえ分かったのだが。

「どう、します？船長」

困ったようなジョーカーの声に、壁にもたれて考え込んでいた自身の船長を見上げる。

「そうだな」

ふ、と視線を上げた船長の目を見て、脱力する。

ああ、これもう何言っても無駄だ。

クロバの心の声が聞こえたわけではないだろうに、船長は楽しげな

目で船員^{クルー}を見渡した。自分と同じことを悟ったのだろう、周囲の船員^{クルー}たちの表情がみな一様に諦めのそれへと変わっていく。船員たちに囲まれて、中心に立つローは機嫌のよい時に浮かべる、猛獣のような笑みを浮かべた。

「あいつ、気に入った。仲間にするぞ」

まどろみの目覚めを待っている 眠りを揺らがす出会いの始まり？（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

読みづらいなどのご意見があれば、できるだけ改善していきたいと思っています。何かあればよろしく願います。

感想を頂けたら踊って喜びます。執筆の原動力！

まどろみの目覚めをまっっている 海賊と作家は想起する

ふわり、と潮のにおいが鼻をつく。商人だろうか、がやがやと集団の声が青空に広がる。

ゼロルは海沿いに歩きながら留まっている船をチェックしていた。いくら荒くれ者が多いとは言っても、観光を売りにしている島である。戦闘の跡がそこかしこに見られるものの、港はそれなりに活気に満ちていた。

出来れば商船、海賊に目を付けられたからには、今日出港する船が望ましいのだが。

なかなかそう簡単に望みにかなう船が見つかる訳もなく、先ほどもう30分も経過している。

ため息をついて足をすすめるゼロルは、血のにおいに辟易しつつも焦っている様子はない。

（たぶん彼らは、報復にくることはないだろう）

その確信がどこかにあった。

思い込みはとっさの行動を鈍らせる。それが分かっているから警戒は怠らないけれども。

賞金首を相手にへらへら笑っていた男の顔を思い浮かべてみる。プライドはあるけれどそう愚かでもない。

（あの程度の雑魚を奪われたから、能力者に誤魔化して逃げられたから）

その程度でむきになるような。

（そんな小物には見えなかった）

自分の思考力と勘はかなりのレベルで信用している。彼らはきつと、残忍で残酷で。

そして誇り高い海賊なのだろう。

まあ、それでも島の中ではったり出会うなんて可能性は残っていて、そんなことで時間と取られるのはごめんだだったので、こうして船を

探しているのだけど。

潮のにおいに、ふいに強い血のにおいが混ざるのを感じて。
はやく、見つければいいのだけれど。

うんざりと心中でごちて、ゼロルは足を速めた。

「せんちよお」

後ろから聞こえてきた間の抜けた声に、ローは立ち止まらず首だけで振り返った。

「なんだ」

「さっきの子って能力者だったんですね」

首を傾げたのはハートの海賊団航海士であり、唯一の女性^{クルー}船員であるスピードである。

わざわざ船長である自分が振り返っているというのに、ほてほてと最後尾を歩く彼女はそのスピードを速めようとはしない。

相変わらずのマイペースだな。

少し呆れて、ローは前を向きなおした。

「それが？」

「なんで能力者って分かったんですか？」

「あ、それ俺も知りたいっす」

「確かに、能力使ったなんて全然分かんかったよな」

周りの船員^{クルー}も疑問に思っていたらしい。スピードの質問に被せるように、次々と声が上がった。

「簡潔に言えば仕草だな」

「仕草?!」

でもそんなそぶりなかったじゃないすか!!とシャチの大声に、辺りを歩いていた通行人がチラチラと目を向ける。声がでかい、とペンギンに頭を殴られて悲鳴を上げるシャチに、集まった視線が蜘蛛の子を散らすように逸らされた。

「で、でも、シャチの言う通り、ですよネ？」

「あー、確かに」

ジョーカーとクロバの声が後を追ってきた。

面倒くさくなってきた。ローは後ろをちらりと眺めて端的に答えた。「しゃがんだ時の姿勢。男に触れた時の手の添え方。視線が男にむいてなかった事」

あれは目立たないようにしよう、という意図があつての仕草だった。だろ。

それだけ言つてさつさと先へ進むローの背後で、感嘆の声が上がる。「すつげえ!」「流石キャプテン!」「シャチとは頭の出来が違うな」「それはお前もだろ!」

背後で盛り上がる船員クルーを無視して、ローは少女の姿を思い出す。能力を言い当てた際に一瞬見えた、焦ったような表情。人質になった時の態度やあの能力を見た限り、自分たちとの戦闘に対して焦つたのではないだろう。ならば彼女が恐れたのはおそらく。

面白い。

頭の回転が速い。自身の能力の使い方を知っている。戦闘能力も高い。そして何か、知られたくない事実を抱えている少女。自分の洞察力を恐れた彼女は、

何を言い当てられることを、恐れたのだろうか？

まどろみの目覚めをまっている 海賊と作家は想起する（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

読みづらいなどのご意見があればできるだけ改善していきたいと思っています、何かあれば連絡お願いします。

感想があれば飛んで喜びます。執筆の原動力！

まだ名前のない感情が、まどろみの目覚めを待っている？

港を海沿いに歩いていたらゼロルはふと、一隻の船に目を止めた。

ずらりと並ぶ帆船の中で異彩を放っているそれは、普通なら一生のうちでも見ないようなもの――――一隻の潜水艇だった。

「へえ」

思わず近くに寄り感心の声をあげる。

自分も一度本で読んだことがあるだけである。船といえば帆船のこの時代、潜水艇など見たことも話に出たこともない。

（声をかけたら中を見せてもらえるかな）

明るい黄色の船体を見ながら心中で呟いてみる。どこか丸みを帯びたフォルムは可愛い。

商船だろうか。もしかしたら軍人が貴族辺りの金持ちの船なのかもしれない。

好奇心が強い方だというのは自負していたものの、初めてみる潜水艇に一瞬自分の目的を忘れる。

（早くここを離れた方がいいのだろうけど）

内装や操縦方がものすごく気になる。気になる。この機会を逃したらもうお目にかかることはないかもしれないと分かっているから、尚更。

（いつそのことこの船に乗せてもらうって訳にはいかないかな・・・）

さらに近寄って、ゼロルは船を覗きこんだ。

「すいませーん」

人影は見えなかったが気にせず、それまでよりも少々大きな目の声を上げる。

「あの、誰かいませんか？」

「はい、何でしょうか？」

船内を伺うように身を乗り出していたためか、声をかけられるまで

背後に人がいることに気がつかなかったことに、少々驚きながらゼロルは振り返った。そして、
珍しい船なんかに気を取られずにさっさとこの島を出ていれば、と心底後悔した。

振り返った少女が絶句するのをローは愉快的な気持で眺めていた。驚くのも無理はないだろう。とはいえ、先ほどの会話だけでも頭の回転は速そうに見えたので自分たちが追うことを想定していなかった訳ではあるまい。

珍しい潜水艇に興味を引かれていたのだろうか。船好きなのかもしれない。

彼女を探す前に船に寄ろう、と言っていた傍からその探し人を見つけたのだ。

それも自分たちの船の真ん前で。

既に船員は彼女を逃がさないように配置してある。逃げようにも逃げられない。これで逃がしたらハートの海賊団の名折れである。もとより逃がすつもりなどなかった。

やられた。

振り向いて、そのままゼロルは全身を緊張させた。

気が付けば完全に包囲されている。自分の後ろは海で、その周囲をぐるりと取り囲まれた状態で。

対象を視認できない以上、ゼロルの能力は発動しない。

つまり、このように周囲を取り囲まれた場合、先程のように全員に一気に能力を使うのは不可能で。

今度は本当にため息をつきながら、ゼロルはゆっくりと両手を肩まで挙げた。

まだ名前のない感情が、まどろみの目覚めを待っている？（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

読みづらいなどのご意見があればできるだけ改善していきたいと思っています、何かあれば連絡お願いします。

感想があれば涙ぐんで喜びます。執筆の原動力！

まだ名前のない感情が、まどろみの目覚めを待っている？

これ見よがしにため息をついてみせて、ゼロルはゆっくりとホールドアップした。

にやにやと笑っている男―トラファルガー・ローに向き直り、口を開く。

「詰みです。まさか捕まるとは思わなかった」

「逃げないのか？」

にやにやと笑う男には攻撃の意思はないらしい。ゼロルを取り囲む船員たちにもそれは伺えて、ゼロルが無理にでも能力でこの場を逃げようとしなかった理由のうちのひとつが、これだった。軽く眉を上げて返す。

「どこに逃げるっていうんですか？港（こ）を押さえられた以上、私にはもうこの島から出る手段がない。こうして港へやってきたということとは、私がこの島の住民ではないことくらい分かってるんでしょう」「ただ単に自分の船に用があっただけかもしれないぜ？」

「そうですね」

特に反論せずに肩をすくめて流すと、周囲を囲んでいる船員（クルー）たちの緊張がやや緩んだ。トラファルガーは未だににやにや笑いのままである。

「大した度胸だな。その無表情は元からか？」

「貴方には関係のない話でしょう。大きなお世話です」

「そうでもないぜ。ウチの船が気に入ったようだな」

「ウチの、って。この船あなたの方の船だったんですか？」

流石に少し驚いてゼロルは尋ね返した。てっきり娯楽に金をつぎ込むような人間のものだと思っていたのだけだ。いや、海賊のやつていることを考えればこれ以上ふさわしい持ち主もないのかもしれないが。

「ウチの船、気に入ったんだろ」

もう一度同じ言葉を繰り返されて、表情がやや訝しげなものになるのを自覚しながら、ゼロルはゆっくりと頷いた。

「珍しい船ですから。実物を見たのは初めてです」

当たり障りのない答えを返しながら、ゼロルはまた心中でため息をついた。相変わらずこの人物の思考は読めない。自分の能力に興味があるのかと思っていたのに、そこには一言も触れようとしない。攻撃する意思もなさそうだし、一体なぜわざわざ自分を追ってきた？ 思考に半分ほど気をとられていたゼロルは、だから次の一言にとっさに反応できなかった。もっとも、何も考えていない状態でも難しかったかもしれない。

「お前、俺たちの船に乗る気はないか？」

完全に予想外のセリフに、ゼロルは思わず動きを止めた。

「何を、考えてるんですか」

口からこぼれた言葉は珍しく考える間もなくとっさに出た言葉で、しかしだからこそゼロルの混じりけのない本音でもあった。

初対面の自分、おそらく能力者でしかも何の能力が分かってもいない自分を、

「仲間に誘ったんだが？」

聞こえなかったのか？と余裕の表情で言う男にとっさに腹が立つ。聞こえなかったはずがないと分かっているくせに。

一瞬噛みつくような表情を浮かべたものの、しかしゼロルはひとつ息について少々強引に気を静めた。

人の神経を逆なでするような表情は腹立たしくてしょうがないが、（でもそれに乗って感情的になるなんてそっちの方が腹が立つわ）

「海賊って、そんなに簡単に仲間を決めてしまうものなんですか？」
会ったばかりの人物相手に？と皮肉気に尋ねれば、目の前の男はあっさりとうなずく。

「お前、船を探してるんだろう？」

能力者で女の一人旅なんて、乗せてもらえる船を探すのも手間だろう？うちの船なら、お前が能力者であることはさっきの一件で分かっていているし、珍しい船に乗り込むチャンスだぜ？

愉しそうな表情をそのままにすらすると語った男の眼は、純粹に、純粹にゼロルを見つめていて。

自分を取り囲む人間たちの気配からも、どうやら本気で言っているらしい、とゼロルは気が付いた。

正気だろうか、とは思わないではない。警戒を完全に解いた訳でもない。

それでも。彼の提案は十分に魅力的だった。

「話だけでも、聞きましょうか？」

いつ攻撃されても大丈夫なように警戒心はそのまま。それでもゼロルは笑ってみせた。

まだ名前のない感情が、まどろみの目覚めを待っている？

「簡単な話だ」

男はニヒルな笑みを浮かべたままで言葉を続けた。

「お前は俺たちの船に乗る、俺らは冒険の間お前の力を借り、お前は目的の島まで安全に航海できる」

「それをしたとして、あなた達にとって何か利益があるんですか？」

空は腹が立つくらい快晴だ。ゼロルは眉を顰めた。

「もちろん」

「俺はお前が気に入ったんだよ」

にやりと浮かべられた笑みに嘘はない、とゼロルは唐突に理解した。理論と理屈を優先させる自分ではあるけれど、それに固執するほど自分は愚かではない。

「どうして、」

呟く。

珍しく、ゼロルは自分から本音をこぼした。

「あなたは変わった海賊だわ」

低俗な残忍な海賊団だと聞いていたのに、これではまるで誠意さえ感じられる。

「俺は」

思いがけず帰ってきた返事に顔を上げる。そしてこちらを見つめる強い目にぶつかった。

それは先の賞金稼ぎとの戦いでも自分が能力を発動した時にも見せなかった、痛いほど真剣な表情で。

「俺は海賊王になる男だ」

静かな声でそれを言い切った彼は真剣な表情で、目の奥に野心を燃やしていた。

どこか遠い海への純粋なまでの憧れと悦びだけを写していて。

「海賊王。」

ゼロルは呟いた。

（ああ、）

そして思ったのだ。

（彼の船に乗ってみるのも、いいかもしれない）

「私が次に向かっていているのは、聖プリム島なんです」

ふいにゼロルは口を開いた。

どうして自分はこんなことを話しているのか。

確かにこのしつこい海賊団から逃げ切るのは大変そう。この珍しい船に惹かれたのも事実で。能力者というのを隠しての船旅は何かと疲れるのだけ。

その事実以上に恐らく自分は彼らに惹かれているのだろう。

夕暮れを待つ空はどこまでも青く。

「短い間ですが、お世話になります」

視線を上げて、ゼロルは久しぶりに微笑んだ。

まだ名前のない感情が、まどろみの目覚めを待っている？

それから。

ぼつりと呟いたゼロルの言葉に周囲の船員クルーから驚きの声が上がリ。騒ぎ出した彼らに囲まれて質問攻めにされたり（気さくな兄ちゃんやクールなのつばや、喋る白熊まで混じっていた）。

少しだけとまどいながら、ゼロルがぼつとそれに答えて。

ふと、目が合ったトラファルガー・ローは、先程までの真剣な表情が嘘であったかのように愉しそうな笑みを浮かべていた。

「歓迎するぜ」

かけられた言葉と表情に、一瞬ゼロルの脳裏に早まったか、という言葉がよぎった。

「キヨヒキヨヒの実？」

すっとんきょうな声を上げる部下の後ろで、ローはつい、と視線を上げた。

結局今日中にこの島を出ることは叶わず。

一同はゼロルの泊まっていた旅館に戻っていた。

頭が回るだけでなく、趣味もなかなかよいらしい。彼女の選んだ旅館はそれなりに静かで綺麗で。客層もこの島にしてはそこまで悪くはなさそうだ。

1階の酒場であるここを見渡してローは軽く笑みを浮かべた。

この客の中で最も荒っぽい客は自分達だろう。

「ええ。キヨヒキヨヒの実。超人系パラミシアの能力です」

警戒心を解いたのか、同じ無表情でも先程までよりも随分軽い様子で、ゼロルは周りに座って思い思いに尋ねる船員達クルーの質問に答えていた。

「キヨヒキヨヒなんて、聞いたことねえよ」

顔を顰めたシャチに

「あんまり有名な能力じゃないみたいですね」

「拒否、つてことはものを拒絶できるってことなんじゃないの？」

「ものごとを拒絶？」「拒否？」

さらりと告げたジャックと隣で首を傾げたシャチとベボ（さらにその後ろではジョーカーも小さく首を傾げていた）に対して、特に感慨もなくゼロルは頷いてみせた。

「この世に起こる現象、事象。この世に存在するありとあらゆるものたち」

それらを私は拒絶できる。

もちろん限度はありますけど。傍らのグラスを持ち上げてこともなげに言うゼロルと対照的に、彼女を囲んでいた船員の顔が驚愕に染まった。

「え、ちょそれってすごくない？」

「すごいどころじゃないだろ」

あほか、と呟いたダイヤに馬鹿にされたシャチが突っかかり

「じゃあさっきの技って、あたしらに見られることを拒否したとか？」

「近いですね。正確には認識することを、ですけど」

スピードとゼロルの会話にほえー、とジョーカーは感嘆している。

「さしずめあの時発動しようとしてたのは、記憶の拒否ってところか？」

こちらに背をむけていたスピードの向かい側の彼女に問いかければ、ちらりとこちらを見た彼女の表情がどこか嫌そうに歪んだ。

「まあ、そのとおりですけど」

「すげえ流石船長」「記憶とかそんなことまで出来ちゃうわけか」

「すげえなー！あははは」「お前もう飲んでるのかよ！」「ばかやろう飲むなって言っただろ」

酒が入り騒ぎ始めた船員たちの声をバックに、ローはくつくつと笑った。

ふと視線が合ったゼロルはさらに嫌そうな顔になって。

それがますますおかしい。

「もう後悔してんのか？」

わざと揶揄するような声色で尋ねると、一瞬だけ驚いたような表情をして、

そして彼女は再び微笑んだ。

船に乗ると告げた時よりも妖しく、どこか勝ち誇ったようなそれでいて愉しくて堪らないといった、ローのそれとよく似た笑顔で。

「よろしく、お願いしますね？ 船長」

そして彼女の航海が始まったのだ。

まだ名前のない感情が、まどろみの目覚めを待っている

短編 月だけが知っている

キイイインという澄んだ音と同時に、短刀が弾き飛ばされた。

綺麗な弧を描いて飛んだそれよりも先に、短刀の持ち主がドオツと地に伏せる。

倒れた男の意識がないのを確認して隊上がると、ゼロルはまた静かに闇にまぎれた。

何人倒しただろう。

無人の酒場の影で、やや乱れた息を整える。

遠くでパラパラ、と軽い音がした。マシンガンまで持ち出している。先日から期間限定で仲間になった彼らの中にそんなものを使う人間はいなかったように思うから、おそらくあれは奴らのほうの獲物だろう。この街の住人はよっぽど自分たちの、彼の首が欲しいらしかった。

宴会が終わってから3時間。クルー全員の戦闘力を把握している訳ではないので断言はできないけれど、街の人口から考えてもそろそろ終わってもいい頃だろう。住人全員が賞金首だなんて、面倒な島もあったものだ。ため息をつきかけてふと、空を見上げた。月のない夜空は、地上のゴタゴタなどどこ吹く風といった風に澄まして広がっている。

「おい」

はっとして振り返る。

反射的に向けた銃口の前で、ローは呆れたような表情だった。

「随分と余裕だな」

「少々疲れたんです」

ゆっくりと銃を下す。口から出たそれは、我ながら言い訳めいて聞こえた。

ひよい、と肩をすくめて隣に並ぶローの動きを、目で追う。怪我は

してないらしい。予想通りというか、まあ、こんな連中にやられるような腕でないことは分かっていたのだけれど。

「今日は能力を使わないのか」

「混戦ですし」

一人なら使っていた、というニュアンスを漂わせてみると、隣に立つ男は若干面白そうな顔でこちらをむいた。

「用心深い奴は嫌いじゃねえ」

だからおまえを勧誘したんだしな、と続けた言葉に一瞬息がつまっただけだ

「何がですか？」

動揺を抑えて答えた声は思ったよりさりと響いた。

「あの島で、俺達に囲まれたときに能力を使用しなかっただろう？事態を大事にしたくなかったというおまえの主張も違和感のあるものではなかったが」

もしそうなら今日使わないのはおかしい。俺達がおまえを認識できなくて何か困ることがあるか？姿が見えないんだから戦闘法を銃にこだわる必要もない、弾の無駄使いになるだけだ。だから流れ弾に氣を使う必要もない、俺達が戦う中をゆっくり、確実に倒していけばいい。なのにそれをしないのは、

「出来ないから、だろう？」

何か言い返そうとして顔を上げて、問うた彼の瞳が嬉しそうに笑っていて、試されたことに苛立ちすら感じなかった。事実として私は自分の能力の詳細を隠そうとした、彼らを完全に信用した訳ではないからだ。それは私にとっては当然のことで、信用してなかったという事実に対する罪悪感も、後ろめたさも、あいにくと私は持ち合わせていなかった。大体彼だって、私が彼らを十分に信用した訳ではないことなど知っていたのだ。

だからその時私が思ったのは、安っぽい不安や薄っぺらい謝罪の言葉なんかではなくて。

「分かっていたなら」

気を緩めれば笑みを作ってしまうような顔を引き締め、ゆっくりと銃を握った腕を上げて。
聞かないでください、と。

彼の斜め後ろからこちらを狙っていた男を撃ち落とした。

月だけが知っている

（平然と笑う男に一瞬、惹かれたのは紛れもない事実）

短編 青と白の世界

こんな寒い真夜中に、外へ出るような物好きは自分くらいだろうと思っていたのだが。

「何をしてる」

雪の降り積もる町はずれに一人ぽつりと立った影が、ゆっくりと振り返った。

こちらを向いた彼女の吐いた息が白い。冬島の秋なんて、ほとんど他の島の冬と一緒にだ。

「ただの散歩ですよ」

ぐるぐる巻きつけたマフラーを引っ張りながら、返ってきた返事に動揺の影はなく。

気付かれていない自信はあったのだが、驚かせることはできなかったらしい。

（本心を隠すのが上手いやつだからどうか実際のところは分からないが）

さくり、と踏み出した足の下で雪が鳴った。

「あなたこそ、この雪の中なにをしてるんですか」

鼻の頭を赤くして、少し呆れたように風邪ひきますよと声をかけられるが、それこそ余計なお世話である。

「それはお前もだろ」

「つか、俺に指図すんな。」

肩をすくめて返すと諦めたように視線がそらされた。

いまは降りやんだ雪は、そこら中を白く染めている。

ふいに降りた沈黙は雪としっくりなじむものだった。自分にとって沈黙は苦にならない。彼女にとってどうかなどは知らないが、目を細めて雪を見る彼女は沈黙を甘受しているように見えた。

ふわりと風もなく少女の髪が揺れた。

「・・・なんですか？」

「いや」

マフラーを巻き直して、今度はゼロルが肩をすくめた。
また、雪が降るのだろうか。

見上げた夜空に一つだけ星がきらりと光った。

青と白の世界

（雪と、君の青で満たされていた夜）

短編 水面に写る月影は

強いな、と彼は呟いた。

偉いねえ、と彼は笑った。

すごいですね、と彼女は目を丸くした。

それでも記憶の中の少女は、ただ泣いているだけだった。

「ゼロルはさあ、」

唐突にかけられた声にゼロルは顔を上げた。

まっすぐに向けられた視線に、真向かいに座った彼はどことなく気まずそうな顔をする。

「いや、その」

「なんですか？」

持っていたペンを置いて、傍らのホットミルクを一口含む。

声をかける気などなかったのだろう。先日から期間限定で仲間となった彼らの一人、シャチと呼ばれる彼は、自分から声をかけた癖にうろつくと視線を彷徨わせていて。

「なんでもない、は無しで」

何なのか気になるでしょう、と逃げ道を封じてやれば、一瞬嫌そうな表情になった。

全くもって、正直なものだ。

そういう正直さは嫌いではないのだけれど。

「で、なんなんですか？」

「なんつつかほんとその容赦のなさとか、ゼロルって船長に似てるよな・・・」

「そう？」

あそこまで性格悪くないと思いますけど。

そう囁くゼロルに顔をひきつらせてそういう所だ！とシャチは叫んで「そうやって仕事してるのを見ると、ゼロルって偉いよな、って思っ

ただけ」

と、いささかきまり悪そうに言った。

偉い。

幼い頃からその形容詞を貰うことはわりかし多かったように思う。

成長してからはさらに増えた。

女の身で旅をするなんて。きちんと生計を立てられるなんて。自身の能力を最大限に活かしている。頭が良い、自律心が強い。

確かに自分は「そう」なのかもしれない。

一人で旅をして生計を立てて、能力を活かして自律心も強い。それでも。それが事実だったとしても。

心の中の過去の自分は、未だに泣き止まないままなのだ。

水面の写る月の影は

（どこか泣いてるようにも見えて）

墓荒らしの祈り 嵐

「ルタクリス？」

その日、外は大雨だった。

外に出られないせいなのか、普段は食事時以外は食堂に近づかないメンバーまでが集まった食堂で、ふと上陸間近の次の島の話題になり。

航海士であるスピードが告げた島の名前に、それまで静かに本に向かっていたゼロルが、顔を上げた。

「そう、ルタクリス島ー」

「なんだゼロル、知ってんのか？」

頷く航海士とその隣のシャチ、さらに周りの船員たちの視線を集めたゼロルは、そのままこてんと首を傾げて

「いや、どこかで聞いたかなーって程度なんですけど」

どこだったかな、と本を閉じながら唸る。

「何かの本で、読んだとかじゃないんですか？」

「ええ、多分そうだと思うんですけど」

ジョーカーの問いにも顔を顰めたままのゼロルに、はつきりすればとダイヤが声を上げ、本なんて読まないお前は黙ってるってシャチが言いかえし、うるさいでしょ、とクロバが諷め。

「なんかヤバそうなの？その島」

わいわいと言いつつ男たちを気にも留めない、相変わらずのマイペースでスピードが尋ねれば。

「うーん……」

よく覚えてないけれど、あまりいい意味じゃなかった気がする。呟いた彼女の言葉は、賑やかに騒ぐ彼らの耳には届かず消えていった。

暗い。暗い。

深い森の奥には月の明かりなど届かない。手に握りしめた灯りだけが全てで、少女はぎゅっとランプを握りしめた。

左手に抱えた籠を胸に抱き寄せて、木の根が入り組み歩きづらいそこを早足で進む。

慣れた道とはいえ、恐怖は消えない。それでも、願いを叶えたければ行くしかない。

「こんなことで怖がってちゃだめなんだ」

願いを叶えたいのなら、こんな準備段階で躓いているわけにはいかない。

「城主さま・・・」

呟いた言葉は春の闇夜に溶けて消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0399x/>

蒼影

2011年12月6日16時56分発行